



日本エディブル・スクールヤード・ネットワーク運営方針

1.目的

日本エディブル・スクールヤード・ネットワークは、一般社団法人 エディブル・スクールヤード・ジャパン (ESYJ) を母体とし、ESYJとの連携を軸に、カリフォルニア州バークレー市で始まったエディブル・スクールヤード (ESY) の実践を日本国内で推進する、あるいは計画する仲間たちが繋がりを、それぞれの実践から学び合い、日本におけるエディブル・スクールヤード・プログラム (ESYプログラム) の創造、普及のために助け合い、支え合うことを目的としています。また、ネットワーク参加者からメンバーを募り、ネットワーク運営メンバー及びエディブル・スクールヤード研究会 (ESY研究会) を形成し、実践者、教員、研究者など、多様な背景・立場を持つ仲間と共に、以下のプロセスを通じて、多角的に考え、感じ合い、議論することで、日本におけるESYプログラム波及に必要な体系知を作っていくことを目指しています。

●実践をまとめ共有

アメリカで30年、日本で10年、積み重ねてきたESYの実践をまとめ、共有し合います。

●ESYの社会への影響

ESYが社会に対して、あるいは子どもたちの未来に対してどのような価値を提供してきたかを分析し、確認し合います。

●哲学・思想・理念の言語化

日米のESY実践に共通する哲学・思想・理念を言語化します。

2.背景

2014年、ESYJは、東京都多摩市愛和小学校において日本初のESYプログラムを開始。ESYJは、カリフォルニアのEDIBLE SCHOOLYARD PROJECT (ESYP) と、団体設立以前より20年以上にわたる交流を通じ、信頼関係を築いてきた日本で唯一の団体です。日本の教育風土・文化を反映させた教科連携によるオリジナル・カリキュラムを上述校において10年にわたり研鑽し、新たに東京都中央区立阪本小学校にて実践しています。

また、ESYプログラムの指導員となるべくエデュケーター育成を念頭に、2016年～2019年の4年間、研修生をESYアカデミーおよび、サマートレーニングに送りました。また同時に、エディブル・スクールヤードを学ぶ会「TERAKOYA Edible」を2016年より開催し、延べ約350人が参加。後に、研修プログラム「Growing Leaders for Edible Education」を2021年にオンライン、2022年に対面式で開催し、のべ70人が参加。

現在、ESYトレーニングを受講した仲間たちが、国内公立小学校6校（愛和小、阪本小を含む）でESYプログラムを実践しています。

3.活動目標

【短期】

●ネットワーク & 研究会の成果物として以下を作成します。

1. ESYプログラム立ち上げのためのガイドライン
2. 日本での事例をまとめた事例集
3. 各地でのESYプログラムの映像資料

【中期】

●公立校（小中）での実践を5年間で100校に増やします。

【長期】

●ESYは、日米両国の教育カリキュラムに組み込まれ、必修科目となります。

●学校に体育館や音楽室があるように、学校菜園は命を学ぶ教室として当たり前の学校デザインとなり、また学校と地域をつなぐ集会場となっていくます。

●学校給食は地域農家と直接つながり、学校支援型農業（SSA : School Supported Agriculture）モデルを省庁連携の下で作ります。

4.参加者

- ・ ESYを学び、既に実践している方々
- ・ ESYをこれから実践したいと考えている方々
- ・ 日本でのESYの更なる波及・浸透のための関わり合い・支え合いを求め、持続可能な社会を目指す学校・教育関係者、生産者、行政関係者、企業関係者
- ・ 日本でのESYの普及・広報・資金調達をサポートしたいと願う個人

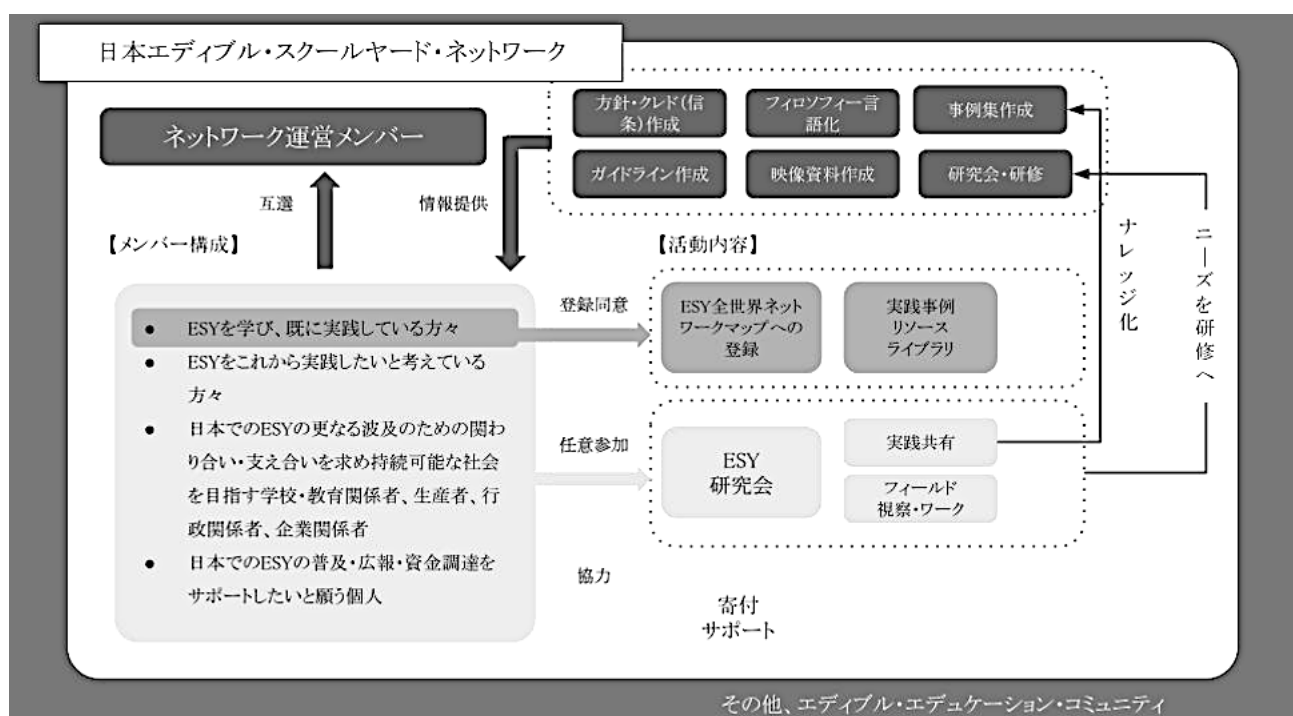
5.活動内容

- ・ フィロソフィー言語化（理念を実践するための哲学・考え方）
 - ESY実践のための哲学・考え方をまとめる
- ・ ESY実践者の活動情報の集約と可視化
 - Edible Schoolyard全世界ネットワークマップへの登録（事例箇所のマッピング）
 - 実践事例リソースライブラリ作成
- ・ ESY研究会
 - 参加メンバー間でのヒアリング・相互視察などしながら実践を共有
 - 実践現場を巡るフィールド視察・およびフィールドワーク
 - ESYをこれから実践したいと考えている方々向けの研修
- ・ 日本でのESYの実践事例集づくり
 - 全国実践事例集（ex.小3国語単元「すがたをかえる大豆」）

- 地域特性毎のベストプラクティス（都市中心部・都市郊外部・海型・山型・島型・小規模校）
- ・ ESYプログラム立ち上げのためのガイドラインの作成
 - カリキュラムデザイン
 - 学習菜園の考え方とそのデザイン
 - ESYプログラム運営のための学校・学級経営
- ・ ESYプログラムの映像資料の作成
 - 実践を始めようとするネットワーク会員が、初期段階において首長、校長、スポンサー、地域サポーターをプロジェクトに巻き込んでいくための映像資料（各地ごとに制作）
- ・ 教育の効果検証
 - 教育効果、コミュニティ価値、環境影響評価を定量・定性的にまとめる

6.運営体制

- ・ 事務局：ESYJがとりまとめを行います。
- ・ ネットワーク運営メンバー：ネットワーク参加者から互選し、前述の成果物作成と活動内容の推進を担います。
- ・ ESY研究会：ネットワーク参加者はこれに任意に参加し、実践共有やフィールドワーク・視察を行います。
- ・ 寄付サポート：日本でのESYの普及を、学校・教育関係者、行政関係者、企業関係者、個人がサポートします。



7. ネットワーク参加の基本原則

- ネットワークへの参加は、個人名での登録を旨とします。
- 参加者は生態系が相互に関わり合うイメージを大事に、メンバーそれぞれがその人らしく、互いの安心、安全に配慮し、自分の話や相談ごとばかりするなどの関わり方を避けます。
- ネットワークと研究会の維持・運営の為、参加者は「可能な範囲」でESYJの定額寄付に協力します。（非会費制）
 - 目安としては「毎月」「3,000円」の定額寄付
 - 受付ページ (Syncable) <https://syncable.biz/associate/ESYJ/donate>
 - ネットワーク運営メンバーは、活動時間やノウハウの提供の形で支援していただき、定額寄付協力は求めません。
 - 学校・企業・団体との連携や寄付協力は都度協議します。
- 前述の成果物完成後は、日本エディブル・スクールヤード・ネットワークの法人化や会費制導入を検討します。